お正客さん

Molly Journal78
2007.2.21

　およそ 2 年半、お茶を習いに行っています。そのことについては、すでに何回かジャーナルに書いていると分かっていつつ、時が経るにしたがい、お茶に対する自分の考えが変わってきたように思いますので、またしても先週行ったお茶会について書きたいと思います。毎年、私のお茶の先生は一月の初めに初釜の会を開きます。その年に自分たちが炉を使う初めての会を象徴しますが、今年は、その初釜の会に行けなくて残念だなぁ、と思っていました。というのも、その週末は自分が企画していた三重県の ALT のスキーツアーと重なってしまっていたからです。ところが不運にも先生のご主人が腰の骨を折り、お茶会は延期されなければならなくなりました。先生やご家族のご心痛は、お察ししますが、お茶会は 2 月のある週末に延び、結果的に私はお茶会に行けることになって、うれしかったです。

　お茶会が延期になって、先生は私が行けるようになったことを知ると、私に“ お正客さん ”になってみないかと言われました。皆さんがどれくらいお茶の事をご存知か分かりませんが、これはかなり重要な役のようでした！“ お正客 ”は伝統に従って、主人がその日の茶会で使っている道具について尋ねるというようなことをします。また巧みに、相判客との会話を広げていくという責任があり、一般的にはその茶会におけるすべての客の先導者のようなものであると、私は思います。まだ茶の湯も日本語を話すことにも初心者の私のような者にとっては、大きすぎる役目のように思いました。とにかく私は、その課題を受けました。先生が私にその役をやってみないかと言われたのを光栄に思ったし、断って先生をがっかりさせたくなかったからです。お茶会前の週は、本番で使わなければならない正式な日本語の練習に充て、たとえそれがどういう意味なのか分からないとしても、丸暗記してものにしました！

　当日朝早く、私は準備を手伝うためと自分の着物を着付けるために、先生のお宅へお邪魔しました。しかし先生は、かつて先生のお嬢さんのものだったポピーの柄の美しい薄墨色の絹の着物を用意してくださっていて、私にそれを着るよう勧めてくださいました。その着物は、今まで私が着た中で最も素晴らしいものだったのではないでしょうか。私は、自分へスポットライトが当てられる事に、とても神経質になっていたので、前日の夜はほとんど眠れませんでした。その日の会に来る人全員が知り合いでしたが、それでもなお失敗するのではないかと心配でした。私は先生に満足して欲しかったのです！結局、私は、言わなくてはいけないほとんどの言葉を覚えていて、すこしだけしかまちがえませんでした。お茶会の間、私はご婦人方全員がお互いに談笑されているのを見ていて、自分の役は、心配していたほど重要ではなかった事に気づきました。私は、お茶会をいつもと違った視点（私はたいてい裏方の手伝いとお茶を点てています）から見る事と、話されている日本語の意味が前より分かってきた事を楽しんでいました。私はもう随分長くお茶を習ってきたような気がしていますが、実際は、始めたばかりで、まだ、いーっぱい習うことがあるのです！